

## The Interface-Based Analysis of Subject Movement under Free Merger

末永, 広大

<https://hdl.handle.net/2324/7363547>

---

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏名	末永 広大			
論文名	The Interface-Based Analysis of Subject Movement under Free Merger (自由併合下における主語移動のインターフェイスに基づく分析)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	西岡 宣明
	副査	九州大学	准教授	前田 雅子
	副査	九州大学	准教授	太田 真理
	副査	九州大学大学院言語文化研究院	准教授	大塚 知昇

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、生成文法理論の極小主義に基づき、英語をはじめとする様々な言語データの考察を通して、主語要素の移動の可否を決定するインターフェイス条件を提案することにより、主語の移動が関わる統語現象に対して、より原理的かつ統一的な分析を提示するものである。現行の生成文法理論では、統語構造構築のための併合操作の自由適用（自由併合）の下で、普遍文法の特性的な解明が進められているが、*that*痕跡効果など、主語要素の移動には厳しい制約が課せられており、主語移動の原理は、まだ十分に解明されていない重要な課題の一つである。本論文では、極小主義の理念をさらに探求し、自由併合の下で、感覚運動 (sensorimotor: SM)、概念・意図 (Conceptual-Intentional: C-I) 部門へのインターフェイス条件に照らして原理的な解決策を示したものである。

第1章で論文が依拠する生成文法の極小主義の指針と目的を述べ、本論文の概略を示した。第2章でChomsky (2013, 2015)によって提案されたラベル理論を概観し、弱主要部の問題点を指摘した。第3章でその問題点を克服するため、Hayashi (2020)の分析を発展させ、弱主要部の想定を棄却した上で、主語要素の移動の可否を決定する、接辞移動と格付与に基づく独自のインターフェイス条件を提案した。そして、主語 *wh*疑問文の統語派生では、内的対併合によるT-to-C移動が行われることで、接辞移動と格付与が可能になるため、当該の派生では主語要素のCP領域への移動が可能になることを論じた。第4章以降は、先行研究では統一的な説明が困難であった様々な文法現象を説明することにより、本研究の妥当性を実証した。4.1節で *that*痕跡効果の他、ベルファスト英語の二重詰めCompにおける主語・目的語の非対称性など、標準英語以外の現象をも説明できることを示し、4.2節で *wh*島からの抜き出しにおける主語・目的語の非対称性の問題、英語やフランス語などに見られる主語移動における目的語と付加詞の介在効果に関する非対称性を説明した。4.3節では本分析が話題化の分析にも適用でき、再述代名詞や虚辞の導入などによる制約の解消に関して、イディッシュ語や、スウェーデン語、フランス語、日本語などの通言語的なデータの観察から、本論が提案するインターフェイス条件の妥当性を示した。第5章では、省略や副詞要素の介在によって *that*痕跡効果などの主語の移動制約が緩和される現象に対して、SMへのインターフェイスにおけるTP削除と、デフォルト格の表出により、当該の問題が救済されると提案し、省略を伴う多重 *wh*疑問文における主語・目的語の *wh*句の共起や、驚嘆・疑念などを示す構文Mad Magazine Sentencesにおけるデフォル

ト格を伴う主語要素のCP移動が可能になることについても説明できることを示した。さらに、Browning (1996)の分離CP仮説を採用することで、本研究が提案するインターフェイス条件の観点から、*that*痕跡効果に見られる副詞効果や個人差が説明可能となることを示した。第6章では本論文における議論を総括し、本研究の理論的意義を主張した。

本論文の最大の特徴と利点は、膨大な先行研究を入念に吟味したうえで、主語の移動現象に関して、極小主義のテーゼに則った自由併合とラベル理論に基づく接辞移動と主格付与に関する独自のインターフェイス条件を提案することにより、広範な通言語的言語事実を原理的に説明することに成功した点にある。それは、新規性、実証性においてのみならず、今後の文法理論研究への理論的貢献の点からも高く評価できる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。